

2021年2月28日(木) 14:00-15:30

KURA「研究者の歩きかた」セミナーシリーズ #8: L-INSIGHT/KURA 連携プログラム

パブリッシングセミナー第2回「ジャーナルを可視化する」

主催: 京都大学学術研究支援室(KURA) / 京都大学 L-INSIGHT 協力: 紀要編集者ネットワーク

※本セミナーは第4回紀要編集者ネットワークセミナーを兼ねます

ディスカッション

南山泰之(国立情報学研究所 特任技術専門員)

亀田堯宙(国立歴史民俗博物館 特任助教)

中村威也(東洋文庫研究部 研究員)

設楽成美(京都大学東南アジア地域研究研究所 助教)

■和文誌をDOAJに登録するメリット

設楽: 南山先生に質問いただいております。「和文誌査読ジャーナルを DOAJ に登録することを検討しています。社会科学分野の和文ジャーナルを DOAJ に登録するメリットがありましたら教えてください」ということで、英文以外の雑誌を登録するメリットについて教えていただければと思います。

南山: ご質問ありがとうございます。さまざまな検索サービスが国内にありますけれども、DOAJ に登録することでそういったところにメタデータが提供され、利用者の目に触れる機会が増えます。やはり海外の研究者は和文が読める方でも、英語の資料を中心に見ている、和文誌にはなかなか気づかないという現実はあると思いますから、こういった方法で利用の線に乗せていくのは大事だと思います。

また、単純に DOAJ などのサービスにインデックスされていることが、論文やジャーナルの信頼性を測る糸口や指標とされる傾向はありますので、とりあえずでも登録しておくといいかなというふうに考えています。

■DOAJと編集プロセスの簡素化

設楽: もう1点、南山先生に質問がきています。「多すぎる編集関連会議とありましたが、どのような内容の会議が多かったのでしょうか。また、DOAJ の項目を参考にすると、実際に会議が減りましたか」という質問です。

南山: ご質問ありがとうございます。一般にどのジャーナルでも編集委員会はあると思うんですが、編集委員会の下に編集分科会がありました。編集分科会では5、6人の先生が集まって全員で論文を見て、その査読結果を編集委員会に上げていました。編集委員会では短い時間で教授クラスの方々がそれを見直していました。このプロセスには重複が多かったので、DOAJ の項目を参考にしながら、査読する方がチェックするべきところ、編集者がチェックするべきところといった仕分けをして、プロセスを簡素化しました。会議も減りましたし、段取りも良くなったと評価されました。

■「離脱状況」の使い方

設楽：私から、亀田先生にお伺いします。私の所属機関の雑誌でも Google Analytics を使っていて離脱状況が出てきますが、この結果の使い方がいま一つわかりません。どういう離脱が問題で、どう改善したらいいのかアイデアがあれば教えてください。

亀田：ご質問ありがとうございます。なぜ離脱が起こっているのか、ユーザーの心の中までは読めないで、データから推測するしかありません。一つ一つの離脱の原因はわからないので、一箇所を見るのではなくて、行動フローの流れのなかでこの部分に離脱が多いとか、同じフローなのにこの特集号だけここで離脱が多いとか、比較して相対的に見ることが仮説を立てるために大事だと思います。例えばある特集号だけ離脱が多いとなった場合には、まずそのページを見に行くことで原因を推測するわけです。ただ、エラーでページが一部表示されていないといったわかりやすい理由が見つかることもありますけれども、はっきりした手がかりがないこともよくあると思います。AB テストという商業的によく使われる、ユーザーをランダムに二つのページに振り分けて、それぞれの離脱状況を見る方法があります。思い当たる限りで改善したページと元のページで離脱状況をチェックします。やり方によっては、ユーザビリティを損なうこともあるので、やり方にはちょっと工夫が必要です。

■オープン・サイテーション

設楽：亀田先生にもう 1 点。最後にオープン・サイテーションの推進という大事なお話がありました。少し時間不足だったかと思います。サイテーション、引用文献をデータ化してオープンにしていく新しい動きと、雑誌は何ができるのかについてももう少し教えていただけますか。

亀田：オープン・サイテーションって何かって言うと、スライドの 4 つの条件（注）を満たすサイテーション情報の提供のことです。

注：1) 機械可読なフォーマットで構造化されていること、2) 引用データの情報が論文本文から分離されていること、3) オープンアクセス・再利用可能であること、4) 引用元・引用先の文献が DOI や URL 等によって識別・同定可能となっていること。

論文にはどの論文を引用しましたって書いてありますが、読者が元の論文にアクセスするには、タイトルで検索したり、図書館に行ったりすることになります。最近は DOI などの識別子が論文に付いていることが多くて、それが書かれていたら簡単にアクセスできるわけですね。例えば DOI の場合、URL に直接紐付けて論文に行き着けるようにしているので、DOI で識別可能になっているとありがたいわけです。フォーマットの問題で引用先の DOI を書かない人も多いんですけど、PDF に書かなくても機械可読なデータとして書いておくと、それでアクセスしやすくなります。

機械可読なフォーマットには JSON や RDF などがあり、RDF の例はスライドにあります。難しく考える必要はなくて、機械が読めればいいので、エクセルで作って、色情報のような余計な情報がない CSV (カンマ区切り) というフォーマットで書き出せば、それでも十分です。

論文本文には著作権がありますので、完全にオープンなライセンスでパブリッシュされることはあまりなく、アクセスが有料なこともあります。そこで、引用情報のファイルが本文の PDF とは別に提供されていく必要があります。

J-STAGE や ScienceDirect など多くの論文掲載ウェブサイトでは、Cited Articles のリストのところで、引用先へのリンクが貼られています。機械可読なかたちで引用先のデータを集めておくと、サイトを作るときに役立ちますし、そのデータを公開するのが一つの方法になります。

識別可能性の話で、DOI が付いていない論文の場合には、WikiData にエントリを入れて、Q 番号という ID を付ける方法があります。WikiCite という取り組みですので、もしご興味があれば検索してみてください。

京大の西岡先生が書かれた僕も共著者に入っている論文の結論にあることですが、J-STAGE では引用文献・被引用文献が表示される機能が実装されているんですけど、大きな機関リポジトリではあまり実装されていません。それを実装する段階で機械可読なデータを公開していけばいいんじゃないかなと思っています。

南山：私も関わっている次期 JAIRO Cloud という機関リポジトリシステムがあるんですけども、そちらではサイテーションもきちんと提供される予定ですので、お待ちください。

■ツイートの責任者

設楽：中村先生に質問いただいています。「Twitter での発信内容は、どのあたりまで内部の確認を得ていますか。もしくは中村先生をはじめ、担当者の判断でツイートしているということでしょうか」ということです。中村先生お願いいたします。

中村：まったく事前の内部の承認、確認は得ておりません。何か問題発言があれば、すべて僕の責任となるということですね。

設楽：上司の方から何かコメントがあることなどは？

中村：ときどきあります。ツイートを削除してくださいというのも二回か三回ありましたね。

■ ツイートによるジャーナルの可視化

南山： 亀田さんと中村さんに質問です。中村さんがツイートには中の人の個性が出ると強調されていて、面白いな、ジャーナルの中の人の可視化がジャーナルの可視化に繋がるのかなと思いつながら聞いていました。亀田さんに質問したいのは、これに関して Google Analytics 的な視点から知見を見出して、うまく広報できるのかどうかというところです。中村さんには、ツイートへのフィードバックなどについて感想レベルの話でよいのでお聞かせいただきたいと思っています。

亀田： 個性っていうのはジャーナルを宣伝している Twitter の担当者の個性ですか？ だとすると、Twitter 経由でどうジャーナルに流入してきているかを分析することになります。Google Analytics の「ソーシャル」で Twitter からの流入を見ます。数だけだと個性までなかなか見えないので、先ほど Campaign URL Builder の話でちょっと紹介しましたが、担当者と打ち合わせて、このタイプのツイートをする時にはこのパラメーターを付けておこうといった準備をして、こういうパターンのプロモーションにはどういう反応だったっていう細かい分析ができるようにしておくと思います。担当者のどういうパターンのツイートがうまくいっているか、どれだけうまく Twitter 広報としてはまってるかが見えてくるんじゃないかと思っています。

[追記] SNS ごとに分析ツールが用意されていることもあります。ツイッターでは「いいね」のような他のユーザの反応の数だとか、ツイート内のリンクへのアクセス数だとか、より総合的な指標であるインプレッションといった分析がありますので、それで反応を把握できます。また、リプライや引用も通知されるのでより詳細なフィードバックが得られることもあるでしょう。Campaign URL まで作るとサイトにきた後の行動までわかりますが、どんなツイートが広報として機能しているかという簡単な分析にはツイッター上の数字を見るので十分であることが多いと思います。

中村： 今回の発表にあたって、どのような発信にアクセスが多いか、サンプルは少ないんですけども検証してみました。先ほど編集の過程も積極的に公表するようにしていると言ったんですけども、その部分はアクセスが少なくても 1000 ぐらいでした。情報を得るほうにとってあまり関係のないツイートは必要とされていないのではと、この一日、二日思っております。

■ 連携、支援体制

設楽： 今日は、図書館の関係の方ですとか、研究支援の関係の方ですとか、ジャーナルを刊行している立場以外の方にもたくさん参加していただいておりますので、ご発表いただいた三名の方から、今日の話のなかで他の部署と連携が取れそうなことや、支援体制を組めそうなことなどについて、助言いただけたらと思います。

南山：機関リポジトリなどといった外部のプラットフォームをうまく使うことがとても重要で、そのプラットフォームの運営者といろいろ情報交換をするような場を作っていくのはとても有意義だと思います。それから、SNSの発信などは、個人レベルで頑張るのは辛いという話もありましたし、できれば組織レベルに持っていけるような工夫ができると良いのかなと思いました。

亀田：Google Analyticsはお金がかかるわけでもないので、大学からの資金支援というのは必要ないかもしれないですけど、結果の使い方、例えば先ほどの離脱に対する仮説の立て方は、同じようなことしてる人と喋っているとわかったりするということもあるので、コミュニティがあるのが嬉しいんじゃないかなと思います。すでに「紀要編集者ネットワーク」を設楽先生が作ってくださっていますけれども、そういうネットワークのなかで喋れる環境があるというのが一番の支援なんじゃないかと思います。

中村：これを聞いている参加者の方々もいろいろな立場の方がいるかと思うんですけど、僕がいろんな図書館などのユーザーとして感じるのは、Twitterのアカウントでもそうなんですけど、公式のアカウントほどDMや質問を受け付けないところが多いことです。それは運営上仕方がないと思うんですけども、それだったら例えば、リポジトリで題名の間違ひを見つけたときに、そのページのなかにこれは間違えてますよと知らせる仕組みがあるといいと常に思っています。先ほど言ったように、東洋文庫は非常にわかりにくいところにそれを作っています。公式では情報発信に積極的ではない機関なんですよね。歴史があるだけに、積極的に発信すると責任が生じるので誰も担当しない。他の公式のところもそういう傾向にあるんじゃないかなと思いますが、何らかのかたちでユーザーの声を拾うルートがあったらいいなと思っています。

設楽：どうもありがとうございました。

付録. セミナー後にいただいた質問への回答

■DOAJへの登録

質問：DOAJ への登録について、もう少し詳しく教えてください。

南山：DOAJ の登録に当たっては、当日に少しだけご紹介しました通り、6つの基礎要件を満たすことが求められます。基礎要件に関する簡単な注意点はスライドに挙げた通りですが、実際に登録するに当たっては、ご自分のジャーナルが各要件を満たしているといえるかどうか、DOAJ ウェブサイトに記載されている詳細な要件に照らして個別に見ていく必要があります。

なお、独力で読み解いていくのはそれなりにハードルが高いものと思いますので、国内の DOAJ アンバサダーである天野様、設楽様にご相談いただくとアドバイスがもらえるとと思います。

■DOAJ以外のお勧めデータベース

質問：他にも登録を検討したらよいと思われるデータベースはありますか？

南山：もしご担当のジャーナルが学協会に関連して発行されている場合は、ジャーナルのポリシーを登録するためのデータベースとして以下のものがあります。

学協会著作権ポリシーデータベース (SCPJ)

https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/?page_id=133

本データベースは、全国の機関リポジトリ運営者が参照するデータベースで、学協会が持つポリシーとは別にジャーナルのポリシーを登録することが可能です。

昨今、大学・研究機関で策定されているオープンアクセスポリシーに基づき、研究者はご自身の論文や記事をリポジトリに登録することが義務づけられつつあります。その際、ジャーナルに掲載した論文をリポジトリに再掲載して問題ないか、研究者または機関リポジトリ担当者が確認することになりますが、個別のウェブサイトでチェックしたり担当者に問い合わせたりする作業はそれなりに負担が生じる作業であり、本データベースが一次窓口として機能することで研究者、機関リポジトリ担当者双方の負担を軽減する効果が期待できます。

ジャーナル運営者側としても、DOAJ の登録に使う情報とほぼ同じ内容で登録が可能なので、あまり追加の負担は生じないものと思われます。是非ご一考ください。

■ウェブサイトの構築

質問：慣れていないとウェブサイトの構築に取り掛かりにくいこともあるように思いますが、何から始めるのが良さそうですか？

亀田：まず、作りたいウェブサイトのイメージに近い、既存のウェブサイトを2, 3探してくるのが良いと思います。技術的には、それらのサイトと共通のツールを使うのも良いですし（Powered by *** のような記述がウェブサイト上にあったりします）、身近に経験がある人と同じツールを使ってみるのも良いでしょう。そのうえで、自分の目的によって、実現すべき要件を考えて、カスタマイズを加えていくことになります。論文に関しては、全て自前で作ろうとせず、所属機関が提供してくれているリポジトリ（京都大学の場合：<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/>）や JAIRO Cloud（<https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/>）、J-STAGE（<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja>）などのサービスを活用しつつ、新刊の発行情報や投稿規定やテンプレートファイルの提供など、リポジトリだけでは不十分になりがちなところを WordPress のようなツールを使ったウェブサイトを提供することをお勧めします。

■Twitterの魅力

質問：Twitter をやっていて良かったことはなんでしょうか？ すぐに反応が得られて楽しそうですが、やり取りが大変なこともありそうで Twitter を始めるかどうか迷っています。

中村：Twitter をやっていて良かったことは、東洋文庫研究部の研究成果として過去に出版した単行書籍（20 種前後）を、「寄贈を希望する機関には送ります」と画像とともに書名もテキストで打ってつぶやいたところ、予想以上に反響があったことです。全国各地はもとより台湾・韓国からも寄贈希望があり、予想以上に誰かの目に触れていること、寄贈により研究成果がより多くの人々に届けられ、利用される機会を得たことに、喜びを感じました。また、DM でのやりとりはほとんどないので大変に思ったことはなく、リプライなどでも同様です。

質問：Facebook ではなく Twitter を選ばれた理由をお聞かせいただけませんか？

中村：ひとつは、他の人や自分が Twitter を使って学術的な情報を集めていたこと。ふたつめには、Facebook では、実名でやっていて友達にならないと先方の記事が見られない閉鎖性があるのに対して、Twitter はほぼ全世界に公開され、閲覧されるという公開性があり、学術情報の発信には最適だと考えました。